



「天才バカボン」「もーれつア太郎」連載50周年

赤塚不二夫 特集

「若者よ、「バカになれ」、これでいいのだ」を持って!

赤塚りえ子さん・ロングインタビュー

『天才バカボン』や『おそ松くん』などのギャグ漫画で一世を風靡したマンガ家の赤塚不二夫は長年、中井近辺に居を構えていた。2008年に世を去った後も、目白大学から徒歩約10分のところに故人が残した住まいが、現在フジオプロの事務所となっている。その赤塚不二夫は昨年生誕80周年を迎え、イベントの開催、新しいドキュメンタリー映画の上映、TVアニメ『おそ松くん』のヒットなど、赤塚流の笑いが蘇った年であった。そこで赤塚不二夫の長女で、フジオプロダクションの社長でもある赤塚りえ子さんに、赤塚不二夫の笑いの秘密、そのドタバタでシニールな「バカの世界」について語ってもらった。

ホントのバカはバカではない

「赤塚不二夫の代表作『天才バカボン』では、赤塚不二夫の考案する「バカ」そのものが描かれていました。赤塚不二夫は誰かを笑わせた、バカになることで一生懸命だったといえると思います。「バカ」が赤塚マンガのキーワードではないで

しょうか。実際、赤塚不二夫にとって「バカ」とはどんなものなのでしょう。赤塚不二夫は「バカ」が「バカ」でいい。他にも、「バカ」って言うのはハダカになることなんだよ。世の中のいろんな常識を無視して、純粋な自分だけのものの方や生き方を押し通すことだ」と語っていました。

「自分が最低だと思っていればいいんだ。みんなより一番劣っていると思っていればいいんだ。さすれば、みんなの努力と心がけが必要で、世の中の常識や価値観に囚われることなく自分の見方や生き方を貫く、純粋な生き方なんだと思えます。また、父はあるインタビューでこう話していました。『自分が最低だと思っていればいいんだ。みんなより一番劣っていると思っていればいいんだ。さすれば、みんなの努力と心がけが必要で、世の中の常識や価値観に囚われることなく自分の見方や生き方を貫く、純粋な生き方なんだと思えます。』」



故赤塚不二夫が愛用した居間で語る赤塚りえ子さん

「お父様のそのいわば「バカ」哲学をりえ子さんはどのように受け継がれているのか、その信念を継承されていると思われませんか。」

りえ子さん 父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

りえ子さん 父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

「父は「これだ」と思ったことは、突っ走ってまう人間でした。父のバカは全くといいませんが、でも好きなことには、まっしぐらなところも似ていると思います。例えは私に「これが見た」と思ったら、世間の価値観とは関係なくそのまま見に行っちゃいます。数年前、あることがきっかけでモロッコの伝統音楽にはまってしまいました。今では毎年どんなに忙しくてもなにかやりくりして、モロッコの小さな村にその音楽を聴きに行きます。いつか行ってみたい、自分がやりたい」と思っています。

目白大学OG 羽鳥早紀さん 梅酒大使にインタビュー

目白大学を卒業したOGが、一風変わった大使に着任した。梅酒大使である。目白大学メディア表現学科を2015年に卒業し、モデル、タレントとして活躍する羽鳥早紀さんが、福井県若狭町の農業生産法人「エコーファーム」により「若狭の梅酒大使」に任命された。三代目となる梅酒大使の羽鳥さんは、若狭の梅酒をもっと全国に広めるため、町内外で開催される梅酒販売会などで活動し、梅の消費拡大に向けたPR活動に取り組んでいる。



若狭町の梅酒を笑顔で語る羽鳥さん

Q. 今回、梅酒大使に任命されたきっかけは何ですか。
A. 大学3年生の時、所属していたゼミの関係で、地域活性化について興味がありました。それで地域活性化について調べているうちに、「若狭町メディア」のPR活動に携わりたいという思いから、福井県若狭町が行っているインターシップを見つめ、関心を引きかけ、参加させてもらいました。そこで「梅酒大使」に任命され、若狭町の梅酒の醸造会社に出会いました。

Q. 梅酒大使に任命され、どう感じましたか。
A. 私自身でも梅酒が大好きです。インターシップが終わり、若狭町は良い場所です。このPR活動を通じて、自分たちが発信していることが、若狭町に良い影響を与えていると感じています。

Q. なぜ一般企業に就職するのではなく、タレントという道を選んだのですか。
A. 3年生になり、一般企業でのインターシップを多く行っていました。一方、なにか自分らしいことに挑戦したいという思いが強く、PR活動に興味を持っていました。PR活動を通じて、自分たちが発信していることが、若狭町に良い影響を与えていると感じています。

梅酒って、甘い、女性が好き、というイメージがあると思います。私がPRする若狭町の梅酒は、甘すぎないのが特徴です。アルコール度数が38%と、少し高めですが、しっかりと梅の香りが残り、甘い梅酒が苦手という男性でも飲みやすいお酒になっています。なにか、それよりも下の微糖でアルコール度数20%の梅酒もあり、無糖でアルコール度数が高い梅酒をきつと感じる女性にも楽しんでいただけたらと思います。若狭町の梅酒は、甘い梅酒が好きの方、甘くない梅酒が好きの方、どなたでも楽しめるものを取り揃えています。一度手に取っていただけたら嬉しいです。

(編集部3年 岩崎真奈)

持ってほしいなど、私はそう思います。

(編集部3年 岡村直哉)

告知
3月25日(土)渋谷区文化総合センター大和田にて「赤塚不二夫祭」が開催!

ここが一押し、西武新宿線各駅名所巡り

特急や急行は便利だが、各駅停車も味があるもの。西武新宿線の各停にはこんな見どころがある。



閑静な住宅街にひっそりと佇む「ちひろ美術館・東京」

上井草駅から徒歩7分の閑静な住宅街にある、ちひろ美術館東京。1977年に開館したこの美術館は、彼女の旧居跡に建てられている。同館のシニア・アシリエイトである中平洋子さんに話をうかがった。

- ちひろ美術館・東京**
- 住所：〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2
 - 電話：03-3995-0612
 - 開館時間：10:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)
 - 休館日：月曜日(祝休日は開館、翌平日休館)
 - 入場料：大人800円/高校生以下無料
 - アクセス：西武新宿線上井草駅下車徒歩7分

絵のような人だった

ちひろの絵は赤ちゃんや子供、花や身近な優しい情景が描かれている。10ヶ月の子供と1歳の子供を描き分けることができた。子供が好きだったということもあるが、それ以上に自分の絵を通して子供たちが幸せにのびのびと好きなことを頑張れる、希望を持って前を向いて生きていける世の中になればいいという理想の世界を夢見ていたからだという。そんなちひろのことを「絵のような人だっ

わさきちひろのことが、なつたは時は、絵本美術館がなく、デパートを会場として過渡期を開いていた。しかし会期が終わり、と次の会場へ巡回してしまふ、「いつ行ってもみられる場所を作らなければ」というファンの方からの声があふく。ちひろの死後、夫の松本善明さんが、ちひろの作品を人類の文化遺産と位置づけていくと二人息子の猛さんに語ったのが美術館の設立の始まりだ。それで遺族が思い切って自宅を半分取り壊して庭に大規模の倉庫を建てたつもりで美術館を建てようとした。ところがアドバンスをもちろ全国的美術館にアンケートを送り調査したところ、絵本美術館という自体前例がなく、そもそも美術館の経営は採算をとることが難しい事業だ、なつたは「悪いことば言わないから辞めなさい」と多々の人から止められた。それが逆に強い動機となり、「だったらやってみようじゃないか」と火がついて美術館はついに完成した。

開館時の建物は老朽化が進み2001年に一度閉館。建物を含めて取り壊し更地に新しく建て直したのが現在のちひろ美術館だ。以前は段差が多くバリアフリーでない建物には、倉庫の工

レベーターを設置し、駐車スペースも増え現在の形になった。また、こどものへやや図書室、絵本カフェも新設され、気軽に子供と一緒に足を運ぶことができるようになった。

1918年に生まれたちひろは、第二次世界大戦の最中に青春時代を過ごした。三姉妹の長女だったちひろは、しっかり者で、絵を描くことが大好きで小さい頃から上手だと評判だった。しかし当時は女性が仕事に就くことが、ましてや画家になることは認められない時代だったため父親から猛反対を受け、願書まで取り寄せていた女子美術大学への進学を諦めた花嫁修行をした。長女ということもあり婿養子を迎えお見合い結婚をしたが、どうしても心を開きあうことができず、相手が絶望して自殺してしまふ。

父親は陸軍の建築師、母親は大日本連合女子青年団の主宰として大陸へ花嫁を送り込む仕事に従事していた。岩崎家は戦前、戦中は比較的恵まれた生活を享受していた。ちひろは戦後に勉強する中で自分自身が今まであまり不自由なく生活してきたが、これくらいの多くの人が苦しんでいたか痛感した。自分が苦しいだけじゃなく、周りの人々も苦しんでいる世の中をこれからは大人として作っていかねばいけないという気持ちで芽生えてきた。そして自分の絵を通して平和の大切さを感じてもらえるような絵描きになりたいと強く思うようになった。父親に反対されたと分かっていったちひろは、家出同然で疎開先から上京する。朝は早朝デッサン会に参加し日中は新聞記者として働き、夜間は美術学校に通った。二月月通っているうちに、少しずつ仕事が増えていき、画家として認められるようになる。その後松本さんと結婚をして息子が誕生する。

愚かな時代にも二度と戻りたくない、自分だけが周囲の人々が幸せで生活できる世の中をこれからは大人として作っていかねばいけないという気持ちで芽生えてきた。そして自分の絵を通して平和の大切さを感じてもらえるような絵描きになりたいと強く思うようになった。父親に反対されたと分かっていったちひろは、家出同然で疎開先から上京する。朝は早朝デッサン会に参加し日中は新聞記者として働き、夜間は美術学校に通った。二月月通っているうちに、少しずつ仕事が増えていき、画家として認められるようになる。その後松本さんと結婚をして息子が誕生する。

現在のちひろ美術館 東京館長は「トットちゃん」の黒柳徹子さんだ。ちひろの絵が好きだった黒柳さんちひろのことが好きだったという新聞記事を読み手紙を送り、それから遺族との交流が始まった。後に美術館を建てるという際に役員に就任した。『窓際のトットちゃん』の表紙にはちひろの絵が使用されている。美術館内には、『窓際のトットちゃん』のフスマも設けられている。(編集部3年 額川佳奈)



「母の日」(1972年)



いわさきちひろ(1973年・54歳)

子供たちが希望を持てる世界を描く ちひろ美術館・東京

春には牡丹が咲き誇る 下落合薬王院

下落合駅から徒歩5分のところにある、薬王院。通称東長谷寺ともいふ。春には牡丹が咲くことで知られているが、最近では野生の動物が現れることも有名だ。

静かな住宅街の中にある、落ち着いた空間のこの寺は真言宗豊山派の寺院で、鎌倉時代に開山されたといわれている。宗祖はかの有名な弘法大師(空海)だ。山門を抜けた左手に、新宿区指定重要樹木のケヤキがある。看板には、薬王院と共に古くからあると考えられているとの記載があった。樹齢は200年以上と推定される。ケヤキを過ぎると目の前には本堂があり、階段をのぼると六地藏と観音堂が見える。普段は歩き訪れる人が多く見受けられるそうだ。

静かな住宅街の中にある、落ち着いた空間のこの寺は真言宗豊山派の寺院で、鎌倉時代に開山されたといわれている。宗祖はかの有名な弘法大師(空海)だ。山門を抜けた左手に、新宿区指定重要樹木のケヤキがある。看板には、薬王院と共に古くからあると考えられているとの記載があった。樹齢は200年以上と推定される。ケヤキを過ぎると目の前には本堂があり、階段をのぼると六地藏と観音堂が見える。普段は歩き訪れる人が多く見受けられるそうだ。

薬王院は別名牡丹寺ともいわれ、その名の通り牡丹の名所として知られている。参道前の薬王院を示す看板にも、牡丹のイラストと共に「ぼたんの名所」と文章が添えられていた。山門を入ってすぐの庭から観音堂までの階段までは、赤や白などの色とりどりの牡丹が咲き誇り、4月の下旬から下旬にかけて、自由に観賞することが可能だ。その昔、奈良県桜井市初瀬にある松本山の長谷寺から牡丹の苗を譲り受けたことが、薬王院に牡丹が植えられることになった。たきつけなのだといふ。現在は約1000株以上の牡丹が植えられており、見頃の時期以外にも手入れを怠らない。花の盛りに限らず、都会の喧騒を感じさせない綺麗な庭園は、一度は見てほしい絶景である。



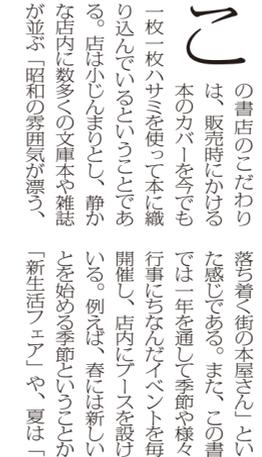
上：薬王院へ向かう石畳 下：柿のなる木。ビデオカメラが設置されている

- 真言宗豊山派 瑞瑞山 薬王院**
- 住所：〒161-0033 東京都新宿区下落合4丁目8番地2号
 - 電話：03-3951-4324
 - 参詣時間：09:00～17:00
 - アクセス：西武新宿線下落合駅北口下車徒歩5分

今年で創業60周年！ 中井の老舗書店

目白大学最寄りの中井駅からすぐそばにある伊野尾書店。1957年に開店し、客のほとんどが地域住民と、地域の読者に愛されて今年で創業60周年を迎える老舗書店である。この書店のこだわりは、季節や地域にちなんだイベントを開催していることだ。店長の伊野尾宏之さんにその話を聞いた。

潮文庫おためフェア」などといったイベントである。年中様々な視点から本を楽しむことができ、素敵な本に出会える。例えは、春は新しいことを始める季節といふことから「新生活フェア」や、夏は新年で、様々なイベントを開催している中でも、今回注目したのは「中井文庫」というイベントである。このイベントは、毎年9月上旬から10月末の秋ごろまで開催されており、2016年で第3回目を迎えた。内容としては、色々な職業の人に、今、自分が働きたい一冊を選んで紹介してもらうというイベントである。紹介者は主に中井周辺で働く人を中心としており、過去には、目白大学の教授はじめ、システムエンジニア、ライター、プロレスラー、そして書店の従業員がお勧めの理由が添えられて、本棚に並べられている。様々な職種や年代の人が普段読んでいない本をお勧めの本を知ることができ、中井にゆかりのある人に絞られているため、興味深いイベントである。伊野尾さんは、本との出会いを大切にしたい、「お客様が興味を持ってくださる、喜んでくれるようなものを考えながら提供していきたい」と語った。今年も昨年同様、中井文庫が開催される予定であるといふ。(編集部3年 橋本はるか)



2016年秋の中井文庫特集

本との出会いを大切にしたい。中井文庫は、毎年9月上旬から10月末の秋ごろまで開催されており、2016年で第3回目を迎えた。内容としては、色々な職業の人に、今、自分が働きたい一冊を選んで紹介してもらうというイベントである。紹介者は主に中井周辺で働く人を中心としており、過去には、目白大学の教授はじめ、システムエンジニア、ライター、プロレスラー、そして書店の従業員がお勧めの理由が添えられて、本棚に並べられている。様々な職種や年代の人が普段読んでいない本をお勧めの本を知ることができ、中井にゆかりのある人に絞られているため、興味深いイベントである。伊野尾さんは、本との出会いを大切にしたい、「お客様が興味を持ってくださる、喜んでくれるようなものを考えながら提供していきたい」と語った。今年も昨年同様、中井文庫が開催される予定であるといふ。(編集部3年 橋本はるか)



今年60周年を迎える伊野尾書店

- 伊野尾書店**
- 住所：〒161-0034 東京都新宿区上落合2-20-6
 - 電話：03-3361-6262
 - 営業時間：10:00-21:00(月・土曜日) 11:00-20:00(日・祝日)
 - 定休日：年中無休(年末年始・棚卸日を除く)
 - アクセス：西武新宿線中井駅下車徒歩1分

